



市史通信

第30号

仙台市博物館
市史編さん室



堀田正敦画像(個人蔵 写真提供佐野市郷土博物館)
正敦は文化面に深く精通し、自ら歌集や紀行文を著したほか、江戸時代最大の鳥類図鑑「観文禽譜」を編纂している。また、「寛政重修諸家譜」などの、幕府の系譜編纂事業の総裁を務めた

中村日向景貞乗馬図(落合十一面観世音大善院蔵)
景貞は馬術に優れ、江戸愛宕山の急峻な石段(通称「出世の石段」)を馬で駆け上がったという逸話を残している



sendai 今昔

相棒—堀田正敦と中村景貞

寛政8年(1796)、父齊村の急死で9代藩主の座に就くことになった伊達周宗(幼名政千代)は、当時わずか生後6カ月。幼い藩主の存在は、藩政に不安を招く要因ともなります。この事態にあたって、幕府老中は仙台藩奉行(家老)の中村景貞らに対し、藩主幼少につき藩務に精励するように命じています。その一方で、周宗の祖母にあたる7代藩主重村正室観心院は、近江国堅田藩主(後に下野国佐野へ移封)の堀田正敦に、周宗の後見を依頼しました。

堀田正敦は伊達家の出身でした。6代藩主宗村の子として仙台に生まれ、堀田家の養子に入った後、幕府若年寄に抜擢されています。このような要職にあった正敦が、幼君周宗と仙台藩にとって、頼もしい後見人であったことは言うまでもありません。期待に応じて正敦も、財政難や一揆などで不安定になっていた仙台藩政に、実に心を配っています。幕府から蝦夷地巡検を命じられて自身が江戸を離れる際には、元老中の松平定信に後見の代理を託したこともありました。かつて老中という幕府最高職にあった人物が、短期間とはいえ一藩の後見人になるのは異例中の異例です。

こうした庇護のもとで成長していった周宗でしたが、14歳になった文化6年(1809)1月に疱瘡を煩い、危篤に陥ってしまいました。幕府が定めた大名統制法「武家諸法度」では、跡目を継がせる養子をとるのは藩主生存中に限るとしており、また、17歳以下の藩主が養子をとる際は吟味を要するとしています。つまり、周宗の危篤で、仙台藩は危機的な後継者問題に直面したのです。

周宗が病床に伏す江戸の仙台藩邸には、すぐさま堀田正敦が招かれ、仙台からも中村景貞らが呼び寄せられました。当時の仙台藩の記録をまとめた「六代治家記録」の文化6年2月7日条には、正敦と景貞らが「密議」したとの記載があります。内容は定かではありませんが、この密議から5カ月後の7月以降、周宗の異母弟齊宗(幼名徳三郎)が、藩主代理を務め始めます。そして周宗が表に姿を見せないまま3年を経た文化9年、18歳になった周宗は病身を理由に幕府へ隠居を願い出、弟の齊宗が跡目を継ぐことを認められました。

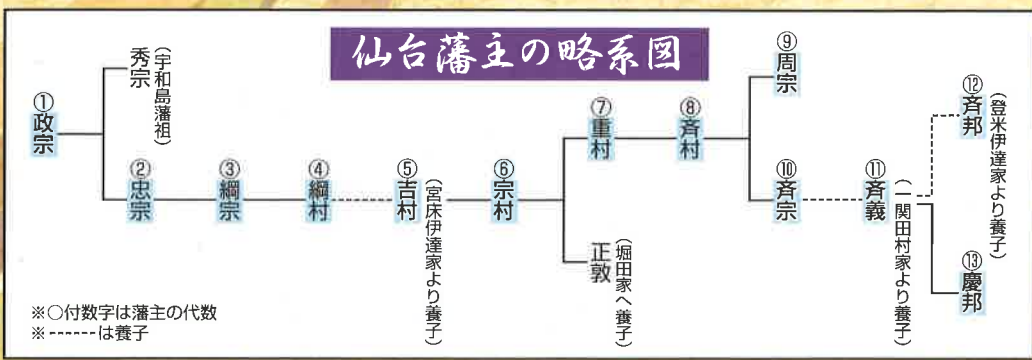
さて、この出来事からおおよそ100年後、大正時代の伊達家当主邦宗が著した『伊達家史叢談』に、衝撃的な一節があります。「実は周宗は14歳で亡くなっており、それを3年間隠し通した末に齊宗に跡を継がせたとの口伝がある」というのです。周宗が病に伏してから齊宗が藩主を継ぐまでの当時の資料で、それを示す確たるものはありません。しかし、周宗が亡くなっていたと考えれば、3年間、一度も姿を見せていない不自然さに説明が付きまします。

『伊達家史叢談』によれば、周宗を生きているように扱い、三度の食事も運ぶようにと、中村景貞が命じたとあります。これが事実であれば、周宗の後見人であった堀田正敦も当然、幕府の目を欺くこの偽装に関わっていたでしょう。

堀田正敦と中村景貞は、正敦の同母姉が景貞に嫁いでいるので、義理の兄弟という間柄でした。しかも年齢が近く、またどちらも少年期から青年期の大部分を仙台で過ごしています。幼君の死に際し、両者の間でどんなやりとりがあったのか史料は残っていませんが、この二人の絶妙な連携によって、仙台藩が救われたのかもしれない。

よりぬき 仙台藩主!

伊達政宗に始まり幕末の慶邦まで、仙台藩の藩主は総勢13人
そのなかから、3人の藩主を選んで紹介します



守成の藩主 二代 忠宗

仙台藩を草創した伊達政宗の跡を継いで2代藩主となったのが、次男の忠宗です。政宗と正室愛姫との間の最初の男子として、慶長4年(1599)に大坂に生まれました。長男秀宗が側室の子であったこと、そして豊臣秀吉の猶子となっていたことなどから、忠宗は幼少時より、政宗の後継者と目されて成長しました。

寛永2年(1625)、忠宗は27歳で国元の仙台へ初入国を果たします。以後、政宗と入れ替わりで江戸と仙台を行き来しました。これは忠宗が、まだ家督は継いでいないものの、藩主に準じる立場を認められたことを意味しています。

寛永13年、政宗が没すると、忠宗は38歳で藩主の地位に就きます。忠宗は藩政をつかさどる奉行(家老)6名の人事を決めたのを手始めに、藩重役の人事とその職務規定の整理、仙台城二の丸の造営、領内の検地とそれに基づく租税制度の整備などを矢継ぎ早に行います。一見地味に見えますが、江戸時代を通じて仙台藩政の柱となるような施策を、忠宗は具体化していったのです。

万事につけてワンマンであった政宗による「個人企業」的な仙台藩を、忠宗は「組織」主体の経営へと転換することに成功し、以後200年以上にわたる仙台藩の基礎固めを行ったのです。



中興の藩主 五代 吉村

伊達騒動の渦中で4代藩主となった綱村は、跡を継ぐ実子がいなかったため、宮床伊達家から従兄弟の一人を養子に迎えました。それが5代藩主の吉村です。

この時期、仙台藩では一門と称される重臣が藩政に大きな影響力を持つようになっており、藩主と対立する場面もしばしばありました。5代藩主の地位に就いた吉村が宝永元年(1704)に25歳で仙台へ初入国すると、一門は連名で「先代、先々代藩主のようでは困る!」という強烈な内容の意見書を出しています。養子に入った身として緊張を抱えていた吉村にとって、この意見書が大きな衝撃だったのは言うまでもないでしょう。

しかし、吉村はこうした一門からの圧力にも負けず、人材の抜擢や制度改革を次々と断行し、藩政の改革を推し進めます。逼迫した財政を立て直すために、江戸での米の販売を強化し、西日本が不作の時に仙台藩領では豊作だったという幸運にも恵まれ、政宗期以来、累積していた借金を見事に清算。さらには、数万両の余剰金を出すことにも成功しました。同じように養子に入って幕政改革に努めた8代將軍徳川吉宗は、「諸大名の中でも特に優れた治世を行っている」と、吉村のことを高く評価しています。

吉村は仕事一辺倒の人ではありませんでした。京都の一流の公家に指導を仰いだ和歌は歴代藩主の中で、もっともレベルが高いといわれ、大和絵風の繊細で美しい絵も高い評価を受けています。また、茶道や能に対する造詣も深いものがありました。その一方で、狩猟を好むなど、アウトドア派の一面ももっています。文武両道に通じた政宗のDNAを、吉村は色濃く受け継いでいたのかもしれない。

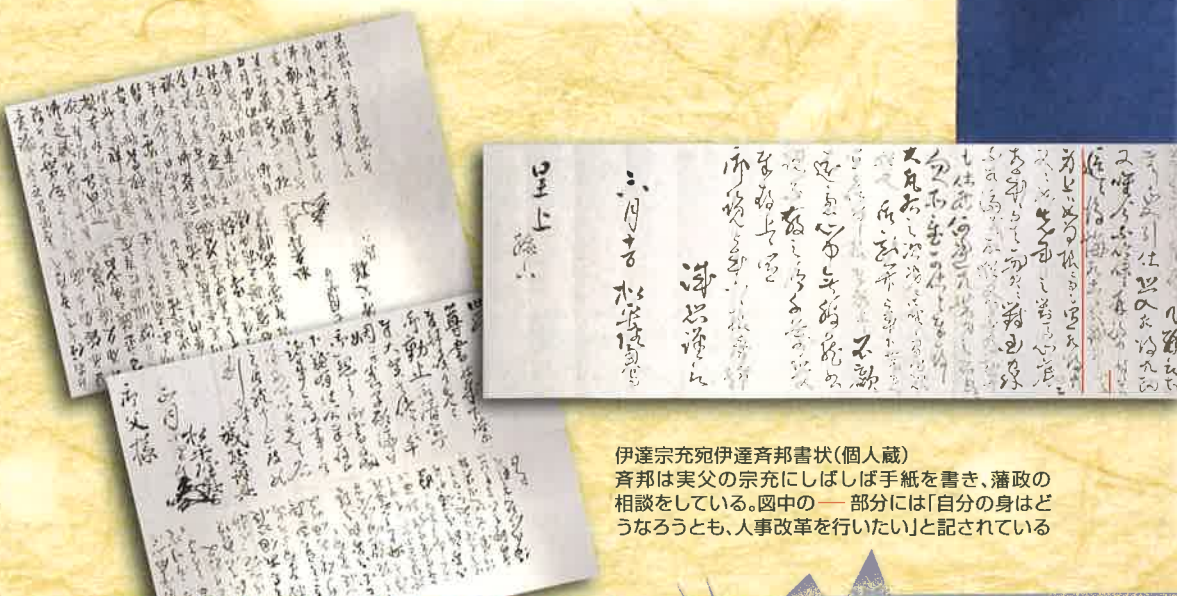


知られざる藩主 十二代 斉邦

8代藩主斉村以後の約50年間(1790年代~1830年代)に在位した藩主は5人。在位期間の平均は10年弱でした。しかも、みな10代、20代の若さで亡くなっているため、この時期は藩主の顔が見えない、つまり藩主の存在感が希薄な時期と言っても過言ではありません。しかし、その事跡を調べ直すと、藩主が率先して藩政改革に尽力しようとした形跡をあちらこちらに見ることができます。なかでも注目されるのは、12代藩主斉邦でした。

斉邦は登米伊達家から養子に迎えられ、文政10年(1827)に12歳の若さで藩主の座に就きました。その就任早々、幕府から関東地方の河川改修を命じられ、8万両以上の大きな出費を余儀なくされます。さらに大洪水や飢饉が連年のように領内に大きな被害を与え、藩の財政も大打撃を受けます。尋常の手法ではこの財政危機を乗り切れないと判断した斉邦は、実父である登米伊達家当主宗充や、抜擢した重役の助言を得ながら、藩財政の建て直しに取り組みます。自らも率先して儉約し、5年間は10万石の格式で藩の諸事を行えと命じるなど、出費を抑える努力をしています。

このような真摯な政治姿勢から、斉邦の姿は領民の中に「若い名君」として定着しつつありました。しかし、茶がゆを常食とするなどの厳しい儉約を自らに課したためか、脚気を持病として患った斉邦は、25歳の若さで亡くなってしまいます。改革の高い志は、残念ながら道半ばで途絶えたのでした。



資料みつけた

伊達政宗の密書

最近、伊達政宗の「密書」とでもいうべき資料が、相次いで発見されました。

一つは、政宗が佐竹・蘆名の連合勢力と緊張関係にあった天正16~17年(1588~89)頃のものとして推定される手紙です。政宗の客分であった天童城(山形県天童市)の元城主天童頼澄に宛てた書状の追伸部分(追而書)を、江戸時代に書き写したもののようですが、「手紙をやり取りする道中に不安があるので、隠密な内容の場合、自分は「むねさね」と署名して出す、そちらも心得るように」という、驚くような内容なのです。

政宗が使おうとしていた「むねさね」は、伊達氏の重臣白石宗実のこと。そして天童頼澄は、佐竹氏らとの戦いのために田村郡付近(福島県三春町など)に出兵していたのでしよう。万が一、手紙が敵の手に渡っても、手紙の署名が実際の差し出し人と異なれば、敵に誤った情報を与えることになり、被害を最小限に抑えることができる。政宗はそんな風を考えていたのかもしれませんが。

この「密書の通達」に基づいて書かれたと思われる、白石宗実を差し出し元とした書状は、今のところ確認されていません。

本当にそうした「密書」が書かれたのか。興味は尽きないところで、また新資料の発見が期待されます。

細々、かやうの書中進候ニ、路次中もいか、にて候間、なりのをもかへ候て、むねさねと此すへハ、かき申へく候、つねの文ハ不苦候、おんミつの用之時、其元よりも御心へ可然候、うへニハ田むらよりとかき申へく候、以上、

天童頼澄宛伊達政宗書状の追而書部分
(天童家文書 多賀城市教育委員会蔵)

もう一つは、天正17年10月に書かれた起請文(約束を守ることを神に誓った文書)です。宛て先は、常陸国額田城(茨城県那珂市)の城主で佐竹氏の家臣でもあった小野崎昭通。内容は佐竹を裏切ったら領地を与えるというもの。

政宗は天正12年に家督を相続して以来、一貫して佐竹氏と抗争を繰り返していましたが、この年、佐竹氏と同盟関係にあった会津の蘆名氏を攻め滅ぼし、さらに佐竹方に付いていた白河氏と講和して、一気に形勢を有利にしました。この起請文は、勢いに乗った政宗が、最大のライバルであった佐竹氏を内部から崩壊させようと、佐竹氏家臣に対して裏切り工作を図ったものなのです。

政宗と小野崎昭通の合意ができて出されたこの起請文は、事が成就するまでは、絶対に表に出てはいけぬ、まさに密書というべきものでした。

先に紹介した密書が佐竹と蘆名の連合勢力に苦慮する政宗の「窮余の一策」とすれば、この小野崎昭通宛の密書は攻勢に立つての「押しの一策」と言えるでしょう。



小野崎昭通宛伊達政宗起請文(個人蔵)

『仙台市史』で仙台藩の歴史を目撃する!



通史編3 近世1

A5判 オールカラー 495頁 定価3,000円

伊達政宗の国づくりと、藩政の開始
仙台藩二七〇年の基礎がここに確立



通史編4 近世2

A5判 オールカラー 603頁 定価3,000円

仙台藩を震撼させた伊達騒動
そして深刻な財政難への取り組み



通史編5 近世3

A5判 オールカラー 631頁 定価3,000円

激動の幕末
内外の難問に直面する藩政の展開

県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。 配送をご希望の方は、電話・FAXで宮城県教科書供給所へ、お申込みください。
発売元/宮城県教科書供給所 〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3 TEL:022-235-7181 FAX022-235-7183

※「仙台市史」に関するお問い合わせは、仙台市博物館市史編さん室へどうぞ